



4色の旗のもとで

中学部教頭 大槻 誠

中学部体育祭の開会式。準備運動で「カナタハルカ」の曲が流れ始め、曲に沿って生徒たちが準備運動というより一つの演技のように表現している姿、その一生懸命さ、美しさに不覚にも目が潤ってしまいました。「ああ、ここにつながっているんだ!」と感慨に浸りながら見ていました。

半年前の4月26日、7年生を迎える会が体育館で行われました。7年生を迎える優しい先輩たち。生徒会役員が寸劇で学校生活を伝えたり、みんなで一緒にゲームをして楽しんだり、さすが中学生の動きでした。そして、そこで青、赤、黄、緑の4色の団決めがあり、まるで、ハリーポッターで「グリフィンボール!」と察を決める魔法の組分け帽子が叫び、皆が歓声を上げるような、3学年が4色に分かれて一つの塊になっていくのを感じました。その後、音楽科の木元先生から合唱祭での曲の紹介がありました。私はその時初めて「カナタハルカ」という曲を聴きました。ただ、「今、何故合唱曲披露なんだろう?」と不思議な気持ちもありました。



それからは、いろいろな取組が団中心に行われ、引っ張っていく9年生は責任重大でした。後輩を指導したり、後輩から励まされたり、時には団の中で口論になって、誰かが中に入って収めていく、そのような姿もありました。

9月30日、合唱祭が行われました。各団最優秀賞を目指し、心を一つにしながらすばらしい合唱を披露しました。喜びを爆発させたり、悔しい思いをしたり。それでも最後は、全員で一体となって「カナタハルカ」を歌い、感動の合唱祭になりました。



そして1ヶ月たった10月28日体育祭の開会式。入場を終え、準備運動。「恋の～意味も 手触りも～」の曲に合わせて一斉に準備運動を始める生徒たちの姿に、4月26日以降の子どもたちの姿が重なり、ぐっとくるものがこみあげてきたのでした。

生徒たちは一生懸命役員を務め、応援をし、自団の勝利を願いながら競技に取り組みました。勝ち負けがあり、歓声と落胆の声と様々な音が混じりました。昼前には雷鳴がとどろき、午後の競技を行わないことを覚悟しました。それでも応援合戦を

体育館で、その間グラウンドの水を吸い取ってくれたいろいろな方のおかげで団演技をグラウンドで、行うことができました。

振り返れば、4月の団決めの日から子どもたちの表情がどれだけ頼もしく変わったか。保護者の方もきつとご存知だと思います。

今、喜びだけでなく、悔しさも飲み込みながら子どもたちが成長する姿に驚かされています。団での活動は一旦終わりましたが、子どもたちの胸に、それぞれの旗のもとでつながり合って進んだことは、ずっと残っていくのだろうと思っています。



心に残る思い出

6学年主任 綾井祐晶

わくわくドキドキした気持ちで迎えた10月4日。6年生は10月4日から2泊3日でタイ第2の都市であるチェンマイへ修学旅行に行ってきました。古都チェンマイは、1296年にランナー王朝初代メンラーイ王により新しい首都として建設され、様々な民族が交流するなかで、タイ北部独自の文化や伝統が生まれてきました。修学旅行では、その文化や伝統に触れるべく、ワット・プラ・タート・ドイ・ステープを訪れたり、



旧市街を車内観光したり、セラドン焼きの絵付け体験をしたりしました。また、本校と30年以上交流が続くワット・メーゲット・ノーイ校を訪れ、交流学習会を行いました。今年度の交流学習会では、活動を通して「嬉しい・楽しい」という感情を共有することをねらいとし、「友達（プラン）になろう」をテーマにしました。タイ語や日本語を交えて行った伝言ゲームでは、最後まで上手に伝わるとハイタッチをして盛り上がっていました。また、バンブーダンスを一緒にしたり、竹馬やムカデ競走をしたりしながら楽しみました。閉会式では北部の伝統的な踊りを見せていただいたり、両校で「思いやりの花」を歌ったりしました。この「思いやりの花」は、1番がタイ語、2番が日本語になっており、長年歌い続けられています。新型コロナウイルスの影響もあり対面での交流は3年間見送られてきましたが、ここチェンマイで再び一緒に歌えることに、喜びを感じた瞬間でもありました。



言葉は思うように伝わらないことが多かった子供たちですが、なんとか気持ちを伝えようと覚えたタイ語や英語、ジェスチャーを駆使しながら気持ちで通じ合えた交流学習会となりました。また、ワット・メーゲット・ノーイ校と本校との伝統が、再びつながった交流学習会でもありました。



2泊3日の修学旅行を通して、寝食を共にした仲間、ワット・メーゲット・ノイ校で出会ったタイの友達、優しくパンダンリーフづくりを教えてくださいましたヴィレッジのスタッフさん、たくさんおまけをしてくれたナイトバザールの方々、最初から最後までサポートして下さったガイドさん、ホテルの方々とその時々での人々との出会い、関わり合いがあり、その時間が一人一人の記憶のひだに刻まれることで、心に残る思い出と変わっていくのだと思います。10年後、20年後と大人になった時、この記憶を辿ってチェンマイを訪れ、またどこかで再会することができたなら、すてきだなと思いを馳せながらチェンマイを後にしました。

